**クレマチスの原種と分類および欧米および日本の歴史と文化　　　　　　　　 2019. 4.11**

**細木高志**

**1. 原種と分類**

**クレマチスはキンポウゲ科に属し、約250種が北半球の温帯に分布し10節に分類され（田村、1988）。よく知られた中国原産のテッセンや日本原産のカザグルマ等はビチセラ節（＝カザグルマ節）に属し、ヨーロッパ南部-西アジア原産のビチセラも同じ節なので交雑が容易で、現在多くの重要な園芸品種ができている。ビチセラ節以外の節には、ハンショウズル節（日本のコウヤハンショウズル、ヒマラヤのモンタナ等）、クロバナハンショウズル節（北米のテキセンシス等）、シロバナハンショウズル節（冬咲きのシルホサ等）、タカネハンショウズル節（北インド・中国南西部のコンナータ等）、ミヤマハンショウズル節（中国北・東北部のマクロペタラ等）、センニンソウ節（中国中部・南部のアーマンディー等）、ボタンズル節（ヨーロッパ・西アジアのビタルバ等）、オオワクテノ節（黄色花のオリエンタリス等）、クサボタン節（伊吹山クサボタン等）がある。これらに、南半球のオセアニアに分布する原種群の**Novae Zelandiae節（常緑のフォステリー系品種等）も加わり、この節内での種間交雑品種（アーリーセンセーション等）もできている。以上11節のなかで、もっとも園芸的に重要な節は**ビチセラ節（＝カザグルマ節）であり、この中の原種のテッセン（*Clematis florida*）、カザグルマ*(C.patens*)、ラヌギノーサ（*C.lanuginosa*、中国原産）とビチセラ（*C.*** ***viticella*）の間の交雑で、多数の園芸品種が生まれている。本誌では、欧米と日本のクレマチス品種育成過程の歴史と文化について解説する。**

２.欧米の歴史と文化

**属名のClematisはギリシャ語で蔓を意味するKlemaから由来し、古代ローマ人は家の壁に這わせて雷避けにしたとされる。またクレマチスの呼び名は多くあり、英語でTravelers’joy（旅人の楽しみ）やフランス語でLady’s Bower(乙女の休息所)などが知られる。野生種のビチセラは、1569年、南スペインから英国に入り、エリザベスⅠ世の薬剤師H.Morgan が栽培していた。16世紀末までに地中海沿岸諸国、東ヨーロッパ、中東、北アジアまで分布するクレマチスの4野生種 (ビチセラ、フラミュラ、シルホサ、インテグリフォリヤ、それぞれ節は異なる)が英国に集められて栽培された（ビチセラは英国にも自生）。しかし、いずれの野生種も小輪種で現在のような大輪種はなかった。**

**小輪の交雑園芸品種に関しては、1830年以前にスエーデンのMagnus Johnsonがインテグリフォリヤを種子親に、ビチセラを花粉親にして交雑し一重ベル型の青花品種のEriostemonを作出したし、1835年にロンドンのPine Apple Place NurseryのJ.A.Hendersonも、同交雑により青花品種 のHendersoniiを作出した。**

**大輪の交雑品種の作出に関しては、スコットランドのIsaac Anderson-Henryが、1855年に中国原産の大輪野生種のラヌギノーサと日本のカザグルマを交雑し、1862年に中間的形質を持つ藤色の品種 Reginaeを作出し、その後1870年にも一重白色品種のHenryi と一重淡紫色品種のLawsonianaを作出した。いずれも、これらの種子親は一重淡藤色のラヌギノーサ、花粉親は八重白色のカザグルマ品種のFortuneiであった。**

**なお原種のテッセンは植物学者C.P.Thunberg（1743-1823）が1784年に「Flora Japonica」に紹介しているし、カザグルマはC.**Morren**とJ.Decaisneが1836年に「Bulletin de l'Acadmie Royale des Sciences, Bruxelles」に掲載している。またP.F.Sieboldは1836年に日本からテッセンとカザグルマの株をヨーロッパに導入している。ラヌギノーサはJ.Lindley(1799-1865)が1853年に「Paxton's Flower Garden Vol. 3」に掲載した。R.Fortuneは1860年頃、日本の園芸業者からFortuneiおよびカザグルマ系（もしくはテッセンとカザグルマの雑種）の一重淡青色品種の.Standishiiを英国に入れ、前述の如く育種に用いられた。**

**イギリスのG.Jackmanは1858年、ラヌギノーサを種子親に、前出のHendersoniiやビチセラ系品種のAtrorubensを花粉親にして交雑して、1863年に一重青紫色品種の Jackmaniiと一重赤紫色品種のRubroviolaceaを発表した。これらは中輪で、ビチセラから濃青紫色で四季咲き多花性を受け継ぐ画期的な品種であり、以後40年間、英、仏、ベルギー、ドイツで、Jackmanii 品種にラヌギノーサやカザグルマの原種が交雑され、大輪濃青紫品種のStar of India、大輪赤紫色品種のGipsy Queenや大輪青色品種のThe president等多数の大輪種ができた。G.Jackman とT.Moore は1872年に「The clematis as a garden flower」を出版し300品種を紹介している。**

**さらに1879年には北米から入った赤花の野生種のテキセンシス（前記のクロバナハンショウズル節）を用いて小豆色で花弁中央が少し白色ぼかし品種のVille de Ryon（1899年、仏国で育成）などができた。**

**1900年代から大戦の影響で育種が停滞したが、1950年代から60年代にかけて再び盛んになり、英、仏、独国に加わるにウクライナ、**スウェーデン**や日本が参加した。大輪淡青品種のH.F.Yang（1954年、英国で育成、ラヌギノーサ系）などが育成された。1960年代以後は、ロシア、ポ－ランド、エストニアなどの東欧やオーストラリアが加わり、さらにアメリカも参加した。淡桃銀色で花弁に赤筋入る品種のJohn Warren（1968年、英国で育成）、桃色の名花品種のPink Fantasy（1975年、カナダで育成）、大輪桃色花で赤筋入る品種のDr Ruppel（1975年、アルゼンチンで育成）など多数の品種が育成されている。**

**クレマチスの交雑育種の歴史を通観すると、最初は原種同志、やがて原種×品種、さらに品種同志の交雑に進み、現在は交雑親（とくに同節のテッセン、カザグルマ、ラヌギノーサ）の特定が難しい場合が多い。**

**次に、クレマチスの欧米の植物画を見ると1605年のHortus Floridus(オランダのCrispijn de Passeら著）にビチセラの絵が出ている。またテッセンの銅版手彩色が、1805年の英国のCurtis Botanical magazine に載っている。ベルギ－の植物画家のPierre-Joseph Redouté（1759-1840）は美花選（1827-1833年の間に出版)に美しいテッセンをバラと共に描いた。これはC.P.Thunbergがヨーロッパにテッセンを紹介した後、Sieboldが日本からヨーロッパに入れる前に描かれている。またManet(1832-1883)は青紫のビチセラをカーネ－ションと共に1882年頃に描いているし、Monet (1840-1926)も白色のテッセンを1887に描いた。**

**3.日本のクレマチスの歴史と文化**

**中国原産のテッセンが日本に入った時期は、室町時代から桃山時代と考えられていて、文明本節用集（1474年頃）には鐡線花の表記がある。桃山時代には、鉄線唐草螺鈿文庫、蒔絵小箪笥、花鳥蒔絵螺鈿洋櫃にテッセン（花弁6枚）が描かれている。**

**江戸時代には、妙心寺の襖絵の「籬に草花図」が狩野山雪（1590-1651）によりテッセンと日本在来のカザグルマ（花弁6枚）の両方が、また西本願白書院の天井絵（1630年頃）にはテッセンが描かれている。｢花壇地錦抄｣（1695年、伊藤伊兵衛）には、カザグルマは「花形名の如く、色白、薄色、薄紫色、るりあり」と書かれ花色の変異が多くあったことが伺われ、テッセンは「風車の類なり、白、紫の二種あり、花落ちて中の蕊が残り千葉なり、あたかも菊のごとく、故に菊から草ともいうなり」と花の形態が詳説された。｢花壇地錦抄付録｣（1733年、伊藤伊兵衛・政武）にはカザグルマ白花八重のユキオコシなどが挙げられているし、テッセンでは白と紫色の2種が書かれている。「草木写生」（1657-1699年間、狩野重賢）では、現在はあまり見られない花弁外部が紫色で内部が白斑のカザグルマの複色花が見られ、「花木真写」（1700-1736年、近衛 家煕）にも出ている。「絵本野山草・五巻」(1755年、橘　保国)では、一重の白、うち紫、紅紫、紫、紺色、白で八重や千重、白に爪赤、かき紅色と色別の種類が記されている。「本草図譜」（1828年、岩崎灌園）で大輪紫カザグルマと八重白花ユキオコシ図が描かれた。「本草綱目啓蒙」（1803年、小野嵐山）で、テッセンは「玉蘂（トケイサウ）花ノゴトク碧色、中心ニ細小紫弁簇生(叢生)シテ菊花ノゴトシ」と書かれ、やや弁化した碧色の雄しべに注目している。またカザグルマは「花ハ鉄線蓮ヨリ大ニシテ紫心ナシ。碧色、白色、千弁、単弁ノ数種アリ、マタ鉄線蓮ノ一種ナリ」と書かれテッセンの1種と考えている。**

**美術品では、テッセンは「芙蓉双鶏図」（1760年頃、伊藤若冲）や信行寺の「花卉天井図」で描かれたし、衣装・工芸でも鉄線唐草模様能衣装、髪梳き美人図（18世紀前半、宮川長春）や立姿美人図（18世紀初期、懐月堂安度）の着物の絵柄で見られる。さらに、蒔絵文箱、伊万里焼き鉄線唐草文そば猪口、京都祇園祭月鉾の天井画、長刀鉾の垂木金具、鉄線花蒔絵湯桶、刀の鍔や釘隠しの装飾に見られる。なおテッセンと書かれていても花弁が8枚の絵や、カザグルマとの区別がつかないものもあり、園芸書や本草書であっても一部では両種の区別は曖昧である。**

**なお中国ではテッセンは清代の「秘伝花鏡」（陳淏子、1688年）や「芥子園画譜」（共著、李魚の序、1679年）に鉄線蓮の表記はあるが観賞花としては日本ほど重視されていなかった。**

**明治以降の日本のクレマチスの品種改良に関して、大正～昭和時代にバラ業者などがヨーロッパから The president、Jackmanii、 Marie Boisselot等の品種を輸入して、これらを親にして戦後に日本品種、江戸紫と藤娘(1952)、大和（1954）、朝霞と白王冠と天塩（1957）、天晴、麻生と柿生(1971)、紀三井寺（1975）、蓼科（1986年）、紫姫等が作出され、現在、日本育成品種は数十以上あり、外国品種を含むと約500品種が流通している。また日本品種の改良に尽くした主な育種家は、桜井元、荒井正十郎、久保田好雄、金子祐、林、鳥海、塩崎吉弥、小沢一薫、杉本公造（春日井園芸センター）や早川廣などである。**

**さらにクレマチスの繁殖に関して、昭和30年前半に久保田好雄によって挿木法が考案され、昭和三〇年後半に小沢一薫によって量産化・実用化された（それまではセンニンソウへの接ぎ木法で増殖効率低い）。**

**今後のクレマチスの育種目標に関して、花が平開するタイプのカザグルマ節内の園芸品種は赤、桃、赤紫、青紫、白色品種があるが、鮮明な黄色はなく、オオワクノテ節の黄色種/品種（花は半開状）との遠縁交雑により黄色の新品種の作出が、また常緑冬咲きクレマチス（タカネハンショウズル節の**アンスンエンシス**等）は白色しかなく、カザグルマ節内の有色種/品種との遠縁交雑により、冬季に花色が豊富な品種群の作出が期待される。これらの解決には節間交雑の克服が必須となろう。**

**参考文献**

**Christopher Grey-Wilson C. 2000. Clematis the Genus .pp1-214. BT. Batsford Ltd. London.UK .**

**細木高志.　2010. クレマチスの系統・品種分類に関する研究[1]　農業および園芸**

**85(6)：656-671.**

**細木高志.　2010.クレマチスの系統・品種分類に関する研究 [2] 農業および園芸85（8)：**

**853-866.**

**Huxley. A.H., M. Griffiths and.L.Margot. 1992. Clematis. pp.640-652. The new loyal horticulture of society dictionary of gadening. Vol 3. Macmillan Press Limited, New York.**

**金子明人. 2009.クレマチス.1-208頁. 別冊NHK趣味の園芸. 日本放送出版協会.東京.**

**北村四郎. 村田　源.1961. センニンソウ属　Clematis L. pp.222-229. 原色日本植物図鑑　草本編Ⅱ・離弁花類. 保育社. 東京.**

**落合小一郎. 1981.　クレマチスの園芸品種. 新花卉111：31-36. タキイ種苗出版.**

**岡本勘治郎. 1950. クレマチス属. pp.762-767. 園芸大辞典・第2巻(石井勇義編).誠文堂新光社.東京.**

**岡本勘治郎・西部由太郎. 1968. クレマチス属.　pp.464-468. 最新園芸大辞典一巻.誠文堂新光社. 東京.**

**齊藤　清.　1969. 花の育種学. D.クレマチス. pp.248-253. 誠文堂新光社、東京.**

**杉本公造・早川　廣　1985. 日本の主な自生種.pp122-123. 世界の主な自生種.pp.124-126. 栽培と品種改良の歴史. pp.127-131. クレマチス（NHK趣味の園芸）日本放送出版協会. 東京.**

**杉本公造.　2009. クレマチスの系統 .pp20-21.クレマチス（色分け花図鑑）.学研教育出版、東京.**

**田村道夫.1981.クレマチスの自生種. 新花卉111：25-30. タキイ種苗出版.**

**田村道夫・塚本洋太郎. 1988. クレマチス属.pp169-180. 園芸植物大辞典二巻.　小学館、東京**

**塚本洋太郎.1964.クレマチス.pp. 68-74 原色園芸植物図鑑Vol Ⅱ.保育社. 東京.**

**塚本洋太郎・五井正憲. 1984. 宿根草編Ⅱ.主要宿根草. クレマチス. pp.138-151. 朝日園芸百科05. 朝日新聞社. 東京**

**塚本洋太郎. 1985. クレマチス. pp.103-110. 私の花美術館. 朝日新聞社、東京.**

**塚本洋太郎. 1998.. てっせん. pp157-169. 花の美術と歴史. 京都書院、京都.**

**ウェブサイト**

[**Clematis on the Web :: A-Z**](http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKEwiKxYfB4tfcAhXCgLwKHUcLCdMQFjAAegQICRAB&url=http%3A%2F%2Fwww.clematis.hull.ac.uk%2Fnew-clemalphasearch.cfm&usg=AOvVaw1dNj6-oUSThYCAlorQ_cPn)

**www.clematis.hull.ac.uk/new-clemalphasearch.cfm**

[**History of Clematis - Herbs 2000**](https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKEwiL7amd4NfcAhVKTrwKHaoLAD4QFjAAegQIABAB&url=https%3A%2F%2Fwww.herbs2000.com%2Fflowers%2Fc_history.htm&usg=AOvVaw1mSPuIEalpKojjd1sUBS0j)**.**

**https://www.herbs2000.com/flowers/c\_history.htm**

**Hybrid clematis.(1900)**

**bulbnrose.x10.mx/Heredity/JackmanClematis1900.html**

[**クレマチスの園芸文化史 - 日本クレマチス協会. Japan Clematis Society**](http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKEwiqkJuW49fcAhVJhrwKHbXUCxEQFjAAegQICRAB&url=http%3A%2F%2Fwww.japanclematis.jp%2Fhistory%2Fhistory.html&usg=AOvVaw2h87wA9koacGFx2ULYDP2F)

**www.japanclematis.jp/history/history.html**

**プロフィール**

**細木高志（ほそき　たかし）**

**1947年　　京都市生まれ**

**1969年　　京都大学農学部農学科卒業（蔬菜花卉園芸学専攻）**

**1971年　　京都大学大学院農学研究科専攻・修士課程修了**

**1972年　　ハワイ州立大学園芸学科博士課程入学**

**1975年　　同課程修了「熱帯植物の組織培養による繁殖」のテ－マで**

**pｈD（学術博士）取得**

**1975年　　京都大学農学部助手**

**1981年　　島根大学農学部助教授**

**1986年　　「揮発性イオウ化合物による園芸植物の休眠打破**

**に関する研究」で アメリカ園芸学会賞受賞**

**1992年　　島根大学農学部（現・生物資源科学部）教授**

**2005年　　「花卉の組織培養による培養系の確立と大量増殖に関する研究」**

**のテーマで 園芸学会・学術賞受賞**

**2008年　　島根大学退職　島根大学名誉教授**

**学会活動　　　園芸学会シンポジウム委員（1989-1995）**

**園芸学会雑誌編集委員（1988-2001）**

**園芸学会評議員（2002-2004、2006-2008）**

**園芸学会中四国支部長（2002-2004）**

**主な研究内容 1.バイテクによる園芸植物の大量増殖と遺伝子組み換え**

**2.園芸植物の形態、生態および遺伝子による品種分類（ボタン、**

**シャクヤク、グラジオラス、サクラ、クレマチス、マクワウリ)**

**3.ボタンの開花調節**

**4.園芸植物の休眠打破物質に関する研究**

**現在.　　　　1.「伝統園芸植物の原種と品種発達の歴史」で園芸学会発表、同テ－マ（ボタン、シャクヤク、グラジオラス、サクラ、クレマチス、マクワウリ)で‘農業および園芸’（養賢堂）に記事連載、「季節の花」で平成23年から毎月‘農業および園芸’に写真と記事連載**

**2. フラワ－ソサイエティーの花アブストラクト編集委員および園芸大学運営委員**

**3. 京都府立植物園・京都園芸倶楽部の理事**

**4.園芸相談員(京都府立植物園、大阪市-咲くやこの花館や長居公園等)**

**著書・論文多数**

**「熱帯観葉・花卉および有用作物」第2章.各種植物のクロ－ン増殖法. p138-151. クロ－ン植物大量生産の実際技術（田中隆荘編）シ－エム－シー（株）.東京.(1985).**

**「ボタン」花木編. 15・主要花木（低木編）. pp143-148. 朝**

**日園芸百科.朝日新聞社. 大阪. (1985)**